

教壇から見た留学生と日本人学生

東京で大学の教壇に立つようになって 30 年が経過した。ここ 10 年くらいの間に、私の大学でも留学生が次第に増加してきた。その多くは、中国、韓国、台湾などのアジア系学生であるが、フランス、ドイツなどヨーロッパからの学生も目に付くようになってきている。これにともなって、講義の後で質問する学生も、多くが留学生によって占められるようになった。

ゼミナールなどの小規模授業では、留学生の存在がさらにいっそう目立つようになってきた。彼らの多くは、熱心に参加するだけでなく、総じていえば、日本人学生よりも積極的に質問し、議論に参加する。優秀な留学生が複数参加しているゼミナールは、活発でまとまりもでてくる。そのようなゼミナールでは、日ごろおとなしい日本人学生も積極的に発言するようになる。その意味で、留学生への門戸開放を謳っている私の大学の方針は教育効果を発揮している。

アメリカでもヨーロッパでも、海外の大学では学生が授業中に積極的に発言する。私がかつて留学したアメリカの大学では、学生たちは先生の講義が先に進まないように妨害しているのではないかと、とかんぐりたくなるほど頻りに質問していた。それと同時に、教員と学生との間に、議論のやりとりがあった。ということは、学生は単に講義内容について質問するだけでなく、教員の説明に対して自分の意見を述べているということである。このようなことは、日本の大学ではほとんどない。

海外の大学から日本に帰ってきたときにつくづくと思ひ知るの、日本の学生のディベートやプレゼンテーション能力の貧弱さである。このことは、欧米諸国から日本に留学している学生たちの経験としてもしばしば聞かされる。かれらの経験によれば、教室で知り合った日本人学生と社会、政治、文化、歴史などに関する問題について少しまじめな議論をしようとしても、ほとんど議論がなりたないという。

これは、それらの問題に関する日本人学生の知識（言い換えると教養）が十分ではないという問題もあろう。しかし、私の見るところでは、問題は知識の乏しさだけでなく、言葉と論理の力を使って自分の考えを表現し、他人に伝える訓練が基本的に欠如しているということからきているように思われる。そのために、断片的な質問はできても、そこから先に議論のキャッチボールを続けることができないのである。

これまでのわが国の学校教育では、読み書きの能力に比べて口頭での表現能力、コミュニケーション能力の養成が不当に軽視されてきたのだろうか。国際化時代ということが言われるようになってすでに久しく、事実私の大学でもかなりの数の学生が海外の大学での授業経験をもつようになってきている。しかし、私の想像では、ある程度のディベートおよびプレゼンテーション能力を育まないで海外の大学に留学しても、結局受身で授業に参加し、せいぜい単位を得るといった経験にとどまってしまうだろう。これでは、国際的に活躍できる人材は育たないのではなかろうか。

ディベート能力のような応用的能力は、中等教育ではなく大学で養成すべきだという意見もある。しかし、私の経験では、積極的に人前で発言する習慣のない学生のディベート能力を養成するのは、大学においても大変困難である。日本人学生の英語能力がなかなか改善されない一つの理由も、この辺りにあるのではないかという気がする。その意味で、私としては、中学、高校の教育課程でディベートを始めとする口頭での自己表現能力の養成が今まで以上に重視されることを期待したいのである。